

## 八九 加藤安彦と橋村淳風

顯榮の地位に在つた者が、一朝引退または隱居すると、諸種の報道機關が其動靜を傳へぬやうになり、それがまた程過ぎると、遂に生歟死歟が人の話題に上ることとなる、今も昔も異りはなす。

加藤安彦は、尾州犬山藩士、幼名安太郎通稱を左源太・内記・安右衛門といひ、號を松園といつた。文政三年六月朔日に生れ、明治三十一年一月三十日、七十九歳を以て歿した。今の御歌所寄人加藤義清氏は、其後嗣である。安彦は少壯美濃の儒者角田春策の塾に漢學を修め、又尾藩の植松茂岳に就いて皇典を研究し、後京都に往來して渡忠秋や八田知紀に歌道を學び、曾て上田仲敏にも就いたことがある。其傳記は名古屋文學史・故學人姓名錄・明治文雅姓名錄・雜誌國の花などに擧げられ、其詠歌は大八洲歌集・科野名所集・千種の花等二十餘種の収録する所であり、家の集を「松廼したより」といひ、明治現存三十六歌撰や現今自筆百人一首など

に選まれてゐることによつて、凡そ當時の歌壇に於ける地位が窺はれるであらう。

橋村淳風は伊勢外宮の祠官、夙く足代弘訓の門に學び、皇典及歌道を研め、詠歌の傳はるゝの乏としない、天保五年十二月二十四日生、明治三十四年三月二日卒、年六十八。家集古登會  
版の合集其他の著がある。

此淳風に宛てた安彦の消息文一通が、此程不圖筆者の眼に觸れた。

一 楮不束なる愚詠を書てよとの御所望、おもて起しにて嬉しく、即認め差上候—御近詠數々  
御洩らし難有感吟仕候—筆の序にかしき事鳥渡申上候は、此月十五日に秋田縣柿崎宗信  
うしに初めて逢けるに、うしの言はるゝに、此程伊勢の山田に遊びたりしが、橋村淳風う  
しの謂へらく、加藤安彦は病に臥し居たりとも、又身まかりたりとも此地へ聞えしが、そ  
の實否聞かまほしく、歸途東京にて聞糺してよとの事なりしが、今日ゆくりなく始めて對  
面して、そは全く空ごとなる事の知られたりと語られたり、已れ今年齡七十六になりた  
れど幸に健なるを、かく他所に聞えしは、とまれかくまれ君が深く御心にかけ給ひてけ  
るが、忝う覺えければ

君ならで誰れか思はむ老松のまだ朽ちずしてありやいなやと

前後の情勢目睹するが如く、淳風が安彦の安否を確めてから、抜からぬ顔で歌を請うたのを、あつさりと其種材を素破抜いて、しかも歌一首に厚意を感辭したところ、此歌合は正しく安彦の勝であつた。